

275. 高野部村の発見

—長浜市鴨田遺跡の中世集落跡—

1. 高鍋村の伝承

「古は高鍋と称せしを、天正年間巽の方位にある地に移住し、辰巳と改め、後更に大辰巳と改む」

大正2年(1913)刊の『近江坂田郡志』は、大辰巳村(現在の長浜市大辰巳町)の村名由来についてこのように述べ^①大辰巳町周辺地域の年配者は今日においてもなお高鍋の呼称をもちいている^②そして大辰巳町では「居立」「屋敷田」等の小字名が集中することから^③、長浜新川と国道8号線の交差箇所付近を高鍋村の故地と伝え^④、現集落の西側一帯の水田を「東田」と矛盾し

て呼称するのは、この地から移住した過去の記憶によるものと考えている^⑤

平成6年(1994)3月、当該地に竣工した架橋に「たかなべ橋」の名称が付されたのも、こうした伝承を信じて疑わない大辰巳町民のつよい要望をうけてのことであった^⑥

2. 鴨田遺跡の中世集落跡

『平成7年度滋賀県遺跡地図^⑦』によると、「たかなべ橋」付近は鴨田遺跡の範囲内にふくまれる。昭和46年度(1971)以降、断続的な発掘調査がおこなわれ、伝承を裏付けるかのように県内有数の中世集落遺跡が姿をあらわした^⑧

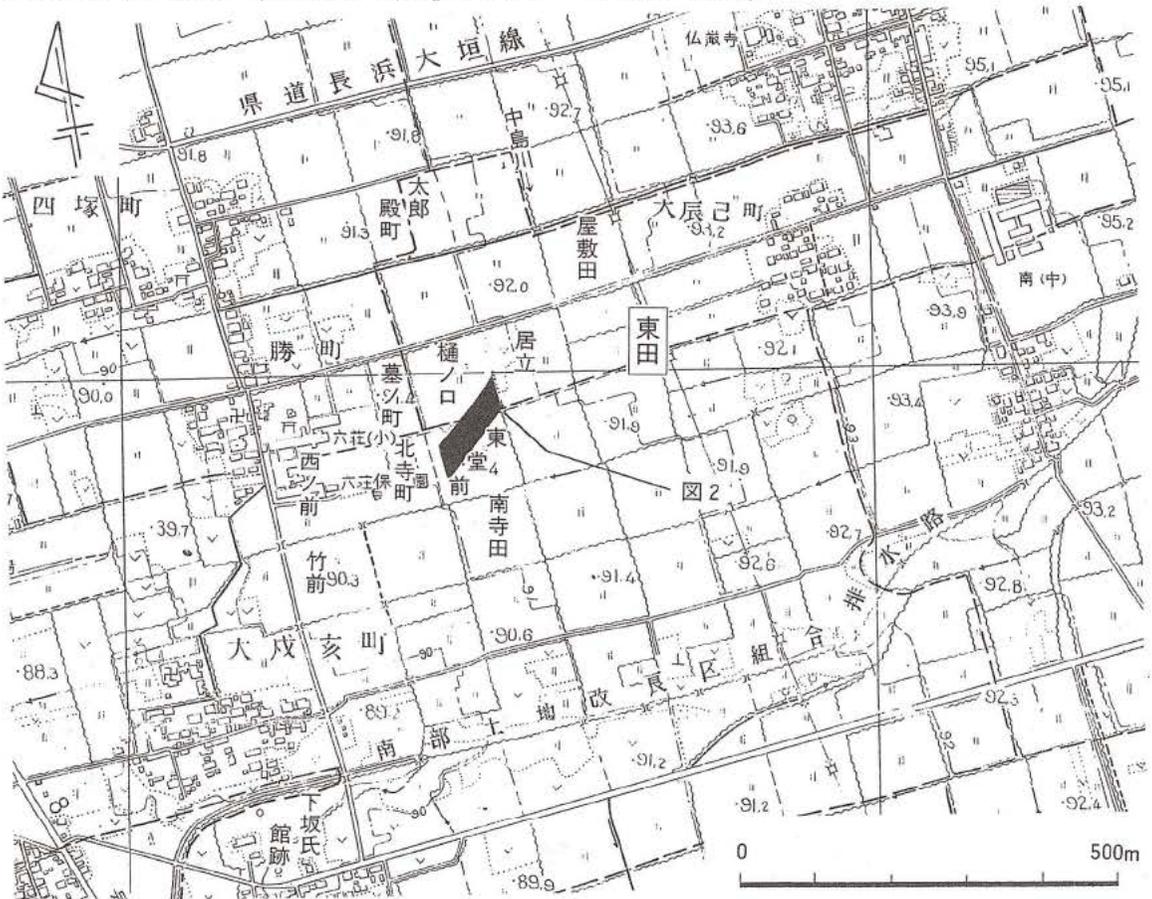


図1 高鍋村伝承地付近におけるの地名等の分布

これまでの調査によると、集落の形成は中島川による地域開発とともに^⑩12世紀後半頃にはじまり（SDI 4等^⑪）、13世紀末から14世紀初頭頃にかけて条里区画溝の埋立（SDI 4等）や開削（SDI 5等）を伴う本格的な改修がおこなわれたと考えられる。そして14～15世紀代を中心に繁栄し、宝徳4年（1452）には多数の西国三十三所巡礼者の来訪すらあったことが知られている（巡礼札の出土）^⑫。集落の廃絶時期・理由については明確でないが、遺物の出土状況などから判断すると、^⑬16世紀代に至って意図的に放棄されたらしい^⑭。

最盛期におけるこの集落は長方形の屋敷地からなり、堀状に発達した条里溝群によって区画されている。SDI 1^⑮はそうした溝群中でも、その検出位置、出土遺物等からきわめて重要な意味をもつと考えられる。すなわち坂田郡条里の復元研究によると、^⑯SDI 1は8条7里6坪と9条7里1坪の境界上に位置している。この条里界は現在においても大辰巳・大戊亥両町境として踏襲され、中世においてはこれ以北の8条域が青蓮院門跡領坂田荘（楞嚴院荘）、以南の9条域は皇室領下坂荘の荘域に属したことが知られている^⑰。

一方SDI 1からの出土遺物として総数30点以上の巡礼札やミニチュアの木製地藏尊像（千体仏）1体等

が知られている。またこの溝とSDI 3の交差箇所付近からは多数の石製五輪塔や石仏、SKIV 1からは銅製花瓶、燭台各1点、さらに北側に隣接するSKIV 2から巡礼札1点、SDI 5からは各1点の鉄袖花瓶、香炉等が出土している。SDI 1南側の小字「東堂前」には、現在も信仰される堂前神社跡があり、その隣接地には小字「北寺田」「南寺田」等が知られることを考慮すると、ここに宗教施設（仏堂）が存在したことはほぼ確実と考えられる。

鴨田遺跡の中世集落跡はSDI 1付近に存在した仏堂を中心に、楞嚴院・下坂両荘境に形成された「村」であったと考えられる^⑱。

3. 高野部村の発見

「大原観音寺文書」「總持寺文書」には「高野部」「高野辺」という集落名が散見される（表1）^⑲。伝承によれば、高鍋村の呼称はかつて弥生時代の土鍋（高坏か）が発掘されたことに由来するという^⑳。大辰巳遺跡および鴨田遺跡（下層）は弥生～古墳時代の集落跡としても著名であることから、^㉑実際にこうしたことを契機として、高野部村から高鍋村への転訛がおり得たとも考えられる。いずれにせよ高野辺村は高鍋村と音通することから、鴨田遺跡の中世集落跡との関係が注目さ

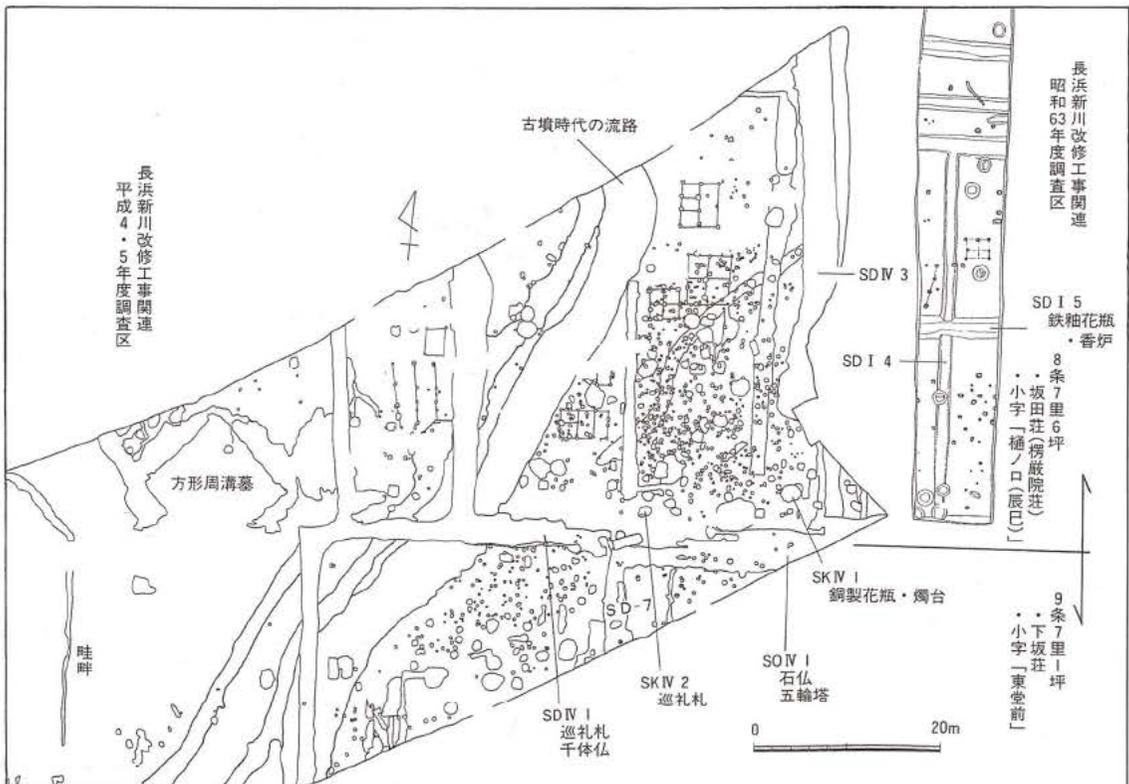


図2 鴨田遺跡の中世集落跡

れる。

そこでまず時間的位置について検討すると、史料上の高野部村は応永26～明応3年(1419～1494)にあらわれる。高野部村が史料に頻出するこの15世紀は、宝徳4年銘の巡礼札が象徴するように、鴨田遺跡の中世集落跡の最盛期に該当している。

つぎに高野部村の地理的位置について検討すると、史料3に「下坂ノ高野部大蔵高範」とみえる一方、史料2に楞嚴院荘内の観音寺仏田の作人として「高野部與一殿」がみえている。また史料8から「高野部孫三郎殿」相伝の田地が、楞嚴院荘8条6里30坪・同7里6坪、すなわち現在の「たかなべ橋」付近に所在したことが知られる。これらのことから史料上の高野部村は高鍋村の故地伝承地に所在し、かつ楞嚴院・下坂両荘域にわたるひろがりをもつたことがうかがえる。高野部村の地理的位置は、鴨田遺跡における中世集落跡の検出位置とまったく一致するといつてよい。

そこでさらに史料を検討してみると、いくつかの傍証を見出すことができる。まず史料4に「高野部浄因庵正濟^⑩」、史料5には「高野部ノ勝樂寺」とみえることから、高野部村には仏僧が居住し、仏堂の存在したことが知られる。これは発掘調査により、その存在がうかがわれた荘境の仏堂に該当する可能性がある。また史料1・3・7から高野部村の下坂荘側に大蔵殿と呼ばれた土豪の居住したことが知られる。史料6にみえる北殿はその呼称から、大蔵殿に対する楞嚴院荘側

の土豪とみられる。両氏の居館等はいまだ未発見ながら、大蔵殿については9条7里14坪の小字「竹前」(館前に音通)付近、北殿については8条7里4坪の小字「太郎殿町」(坂田太郎季時屋敷跡の伝承地^⑪)付近を、一応その候補地としてあげることができる。

以上のように、史料から知られる高野部村の様相は、伝承・地名・発掘調査等から判明する鴨田遺跡の中世集落跡のそれとよく一致することがわかる。この集落跡が史料にみえる高野部村そのものに該当することはほぼ確実に考えられる。

4. 高野部村と辰巳村

浄土真宗仏光寺派の大辰巳道場には宝永3年銘の親鸞画像が伝世し、それには「高鍋村」と墨書される。一方寛永11年成立の「近江国御高帳」には「辰巳村」とみえ、以降の郷帳類もすべてこの表記を用いていることから、^⑫辰巳村こそ江戸時代を通しての公称であったと考えられる。

伝承によれば、辰巳村の呼称は異の方向に移住したことに因むという。しかし大辰巳町の現集落は高野部村故地からみて条里方位で西、真北を基準にすると北東方向にあり、必ずしも南東方向に位置しているとはいえない。^⑬高野部村故地の8条7里6坪の小字「樋口」には、その小分名として「辰巳」が知られることを考慮すると、^⑭高野部村の8条域はもともとこのように称されていた可能性が高い。高鍋村が異称としてしか伝

表1 高野部村関係史料一覧

No.	年次	史料上の高野部村	史料・出典	
1	1419 応永26年2月27日	高野部ノ大蔵殿	観音寺文書	『改訂坂田郡志7』P392
2	1456 康正2年6月20日	作人高野部與一殿	観音寺文書	『改訂坂田郡志7』P407
3	1459 長禄3年12月18日	下坂ノ高野部大蔵高範	観音寺文書169	『山東町史』史料編P143～144
4	1460 寛正元年12月吉日	高野部浄因庵正濟	観音寺文書172	『山東町史』史料編P145
5	1480 文明12年9月5日	高野部ノ勝樂寺	観音寺文書	『改訂坂田郡志5』P683
6	1480 文明12年9月5日	高野部ノ北殿	観音寺文書	『改訂坂田郡志2』P436
7	1481 文明13年7月24日	高野部大蔵殿	観音寺文書335	『山東町史』史料編P227～228
8	1494 明応3年12月5日	高野部孫三郎	總持寺文書31	『改訂坂田郡志7』P83～84
9	1634 寛永11年	辰巳村	近江国御高帳	滋賀県立図書館蔵
10	1706 宝永3年7月上旬	高鍋村道場惣中	親鸞画像	『改訂坂田郡志6』P474～475
11	1792 寛政4年	大辰巳村	近江木間撰	『近江史料シリーズ7』P38

存しなかったのは、辰巳村が高野部村の有力な後身であったとしても、そのすべてを継承したわけではなかったためだろう。⁹

付記

江戸時代に辰巳村を領した彦根藩は、同郡内の同名村（現長浜市山階町）と区別するため、便宜的に「大」字を付したらしい。⁹ 現行町名とおなじ大辰巳村はその慣用化の所産とみられ、寛政4年成立の『近江木間攷』に初見される。行政地名としての採用は明治維新後である。

（重田勉・北村圭弘）

註

- ① 『近江坂田郡志下巻』P104/坂田郡教育会/1913（賢美閣/1980復刻）
- ② たとえば大辰巳町の北東約1.3Kmに位置する長浜市今川町の例がある（北村圭弘「長浜市今川町の「野爪の樋」」『滋賀文化財だよりNo.170』（財）滋賀県文化財保護協会/1992）。
- ③ 小字名については長浜市教育委員会資料による。
- ④ 北村圭弘『長浜新川中小河川改修工事にともなう鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅰ』P2/滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会/1989
- ⑤ 大辰巳町在住の勝見さよ氏のご教示による。
- ⑥ 長浜土木事務所長浜新川改修工事課主任技師国友良行氏のご教示による。
- ⑦ 『平成7年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会/1995
- ⑧ 昭和46年度の調査時は勝町遺跡として報告されている（大江命ほか「勝町遺跡」『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告Ⅱ』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会/1973）。
- ⑨ 当該地付近（坂田郡8条7里）は中島川による灌漑域であり、建永元年（1206）に青蓮門跡領坂田新荘が立荘する（a北村圭弘「近江国坂田荘の開発（上・中）」『紀要第5・6号』（財）滋賀県文化財保護協会/1992・1993およびb北村圭弘「滋賀・鴨田遺跡」『木簡研究第15号』木簡学会/1993）。
- ⑩ 註④文献で報告の遺構番号にはIを付す。
- ⑪ 巡礼者の出身地は東は遠江国、西は長門国におよぶが、その来訪は宝徳4年3～5月というごく短い期間に限られている（重田勉「滋賀・鴨田遺跡」『木簡研究第16号』木簡学会/1994）および註⑨文献b）。その理由は明確でないが、たとえば本来の巡礼道で交通障害がおこり、当該地に迂回道がひらかれたことなどが考えられる。
- ⑫ 銅製花瓶・燭台のような貴重品までわざわざ土坑

に破棄している（重田勉「M区・鴨田遺跡の調査結果」『長浜新川中小河川改修工事にともなう発掘調査報告書V大戊亥遺跡Ⅱ・鴨田遺跡Ⅳ』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会/1997）

- ⑬ 巡礼札は宝徳4年以降も奉納された状態で伝世し、集落の放棄にあたって処分されたと考えられる。
- ⑭ 註⑫文献で報告の遺構番号にはIVを付す。
- ⑮ 中村林一『長浜の條里』長浜市教育委員会/1962
- ⑯ a『改訂近江国坂田郡志第2巻』P13～21、40～42/坂田郡教育会/1941（日本史料刊行会/1975復刻）、b『日本歴史地名大系25・滋賀県の地名』P917～918、933～934/平凡社/1991、および註⑨a文献
- ⑰ 巡礼者が来訪する交通の要路であり、かつ荘境に位置することから、純粋な農村というよりもむしろ市的な要素を有した可能性がある。
- ⑱ a『改訂近江国坂田郡志第2・5・7巻』（日本史料刊行会/1975復刻）、b『山東町史・史料編』山東町/1986、c 滋賀県地方史研究家連絡会『近江史料シリーズ7 近江木間攷（第3分冊）』滋賀県立図書館/1990
- ⑲ 註⑯b文献P932
- ⑳ 宮成良佐「第1章第3節 米づくり・村づくり」『長浜市史1』P100～103ほか/長浜市/1996
- ㉑ 『改訂近江国坂田郡志第6巻』（日本史料刊行会/1975復刻）P453では「高野部浄回庵正濟」と判読されている。
- ㉒ 註④文献P2
- ㉓ 註⑯b文献P1168参照
- ㉔ 「滋賀県小字取調書」（『角川日本地名大辞典25・滋賀県』P1124/角川書店/1979）
- ㉕ 堂前神社跡は現在も大戊亥町民によって信仰されることから、高野部村の一部（9条域）は同町にうけつがれたとみられる。大戊亥町は大辰巳町の関連地名とも受け取れるが、その由来は下坂荘を領した下坂氏館の北東（乾）に位置することに因る可能性が高い。おそらく下坂荘側の高野部村は、その廃絶時にすでに存在した戊亥村に吸収されたのだろう。
- ㉖ 渡辺恒一「資料翻刻・御台所入并御給所御物成高小物成定納開方改出諸事留」『研究紀要第7号』P8/彦根市立彦根城博物館